長崎県西彼杵郡長与町文化財調査報告 第4集

前田川内洞穴

1976

長与町教育委員会

発刊にあたって

前田川内洞穴遺跡は，かって「ぬすと岩」等と称された天然の洞穴でありましたが，先史時代の遺跡として確認されることになりました。本町内では，古代の遺跡はあまりないとされていたのでしたが，昭和44年の堂崎遺跡の発掘調査で先縄文時代の遺跡が確認され今回また，堂崎遺跡に続く縄文時代の遺跡として前田川内遺跡が確認されるに至ったのであります。

昨今，戦後以来続いてきた考え方に転換がみられ，人間のふるさとともいうべき自然への憧憬が復活し，人間のたどってきた路をふりかえろうという気持が育ちつつあることは喜ばしいことであります。人間は，ただがむしゃらに前の方向ばかり気にしていますと，自分の歩いている方向が正しいのかどうかさえ見失いがちであります。歴史とはそのような意味で，人間の進むべき軌道を正す道標と申せましょう。そのような意味で今回の調査報告書が単なる懐古としてでなく活用されるよう望みたいところであります。そのことはとりもなおさず郷土を愛し，文化財を愛することにも連ると考えられるのであります。

本遺跡の調査もまだ緒についたばかりであり，今後の調査によって明確になっていく点も多いと思われます。従って今回の報告はその中間報告とも称すべきものでありますが広く活用していただきますよう諸方にお願いしたいところであります。

末尾ながら，調査から報告書執筆まで努力された関係者各位に深い敬意と謝意を表したいと思います。

昭和49年３月１日

長与町教育長　今　富　正　暁

例　　言

1．本書は長崎県西彼杵郡長与町に所在する前田川内洞穴遺跡について３次にわたって実施した発掘調査の報告書である。

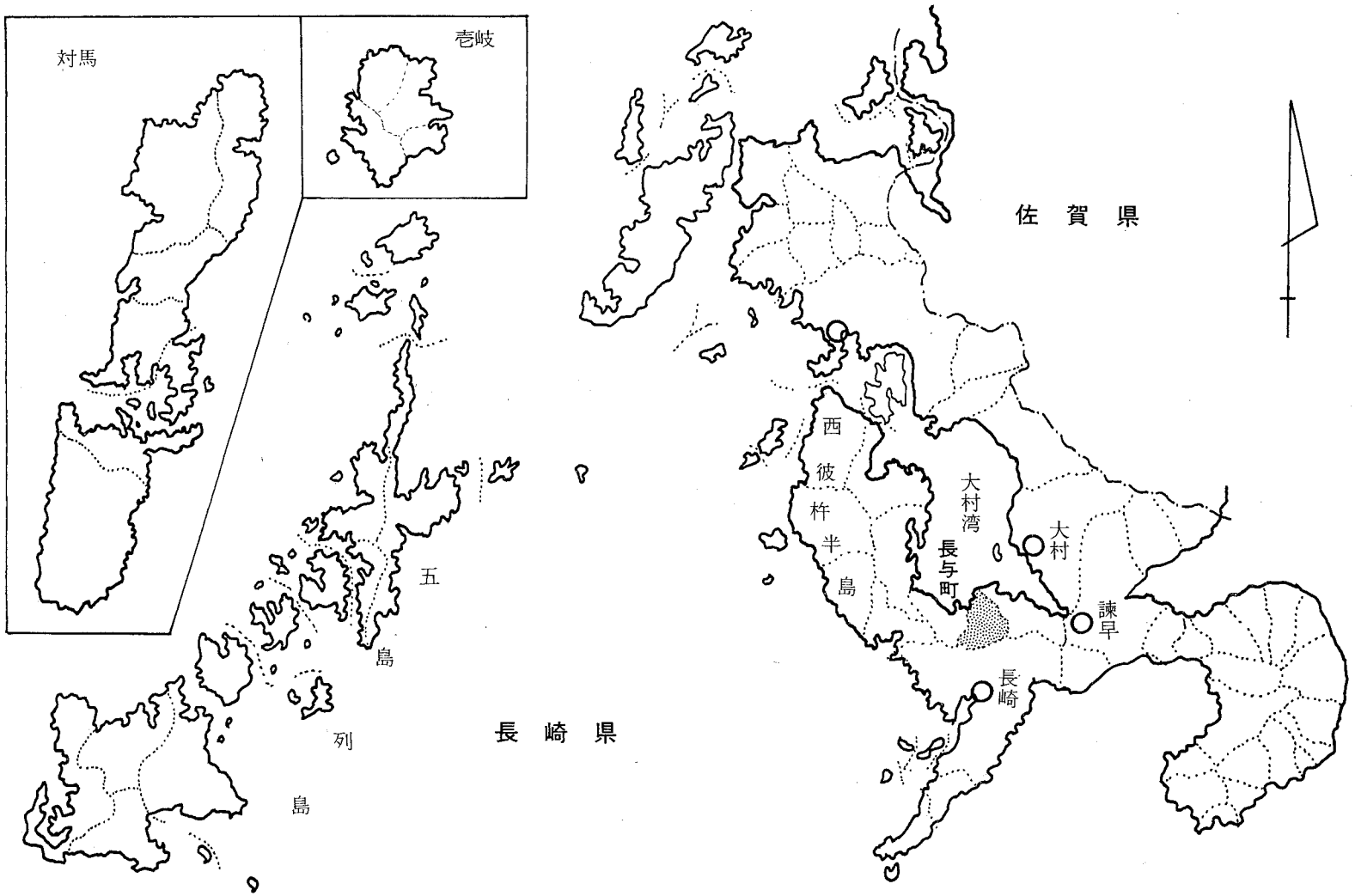
2．調査は昭和45年の試掘調査にはじまり昭和47年に第Ⅰ次を，昭和48年に第Ⅱ次，昭和49年に第Ⅲ次を実施した。第Ⅰ～Ⅱ次あわせて10日間，長与町教育委員会の委嘱をうけて県文化課正林　護が担当した。

3．調査は緒についたところであり，事業完結の意味では報文刊行の時期尚早の感もあるが，保存のための価値づけが本調査の前提であり今次公刊に至った。

4．調査にあたっては，町当局及び町教育委員会の方々には有形無形の努力によって推進された。特に町教育委員会の方々には直接調査活動にまで力を注がれた，敬意と謝意を表したい。また他の有志の方々についても同様であるが，調査の項に芳名を記させていただいた。

5．土地所有者桜井集安氏には調査の便の外に諸点便宜を与えていただいた，厚く感謝申上げる。

6．調査参加者氏名（敬称略・順不同）
松尾五郎・野中建次・佐藤靖彦・左近充正明・中島　衛・（以上長与町教育委員会），喜々津哲男（千葉大学生），築城節子（長与町在住），正林　護（県文化課・調査担当）



第1図　長与町の位置

第2図　前田川内洞穴位置図

Ⅰ．調査の経過及び目的

予備調査

昭和44年７月から８月にかけて長崎県西彼杵郡長与町岡郷堂崎に所在する堂崎遺跡が緊急発掘された。調査の後半，町内の分布調査が実施されたが，「ぬすと岩」と通称され堵博が行われたという洞穴の所在については不明のまま放置された。

昭和45年12月，地元長与町教育委員会よりその所在について判明した旨の連絡があり，同時に遺跡の存否についての調査を依頼された。直接には，同町日当野に所在する墳丘状地形が農道貫通によって損壊されたとの報に基くものであり，昭和45年12月16日～同19日現地を踏査したあと，該洞穴についても現地を踏査した。前者は単なる自然地形であり，後者についても周辺地区に剝片等の散見もなく，洞内にも土砂の流入著しく，遺跡の存否については踏査のみでは速断は不可能であった。開口部も僅かであり，洞内の表面等をみても遺物等見られぬ状態であったため，洞穴の奥壁に接して小試掘抗をあけ，プライマリーな状態の包含層の存否等について調査した。後述するⅢ層上部において黒燿石剝片及び剝片石器を各一点検出した時点で試掘を中断した。この時点での検土杖探査によれば，表土より２ｍ以上の推積があり，遺跡埋蔵の可能性が強まり関係者協議のうえ，「前田川内洞穴」と呼称することとした。

第Ⅰ次調査

昭和45年度における試掘調査によって，「ぬすと岩」は遺跡として確認されたが，検出遺物の剝片が古色著しいことの他は，時期については不明のまま中断されていた。土器ないし，定型的な遺物検出によって遺跡の時期を把握する必要が試掘の時点で指摘され，町内関係者に，その概略について報じた。

昭和47年に入って，現地一帯においても農道開発等，開発事業が予想された。地元町教育委員会が，先行して，遺跡の調査を計画したのは，前段の学術性と後段の緊急調査に対応する必要からであり，調査は県教育委員会文化課に委嘱され，筆者が担当することになった。第Ⅰ次調査であり，昭和47年６月６日～10日の５日間実施された。

調査は，試掘調査区を北方向に延長する形で設定し，試掘坑で確認された層順がどのように変化するものかについて調査し，時期確認資料の検出につとめた。試掘坑に続く層順は，ほぼ水平で，洞外の傾斜度と著しく異ることが確認された。但し，所定期日の中での終了を余儀なくされたため，以下の層順の調査については，精査の機をまつこととし，調査は中断した。洞穴入口は防護柵が施された。

第Ⅱ次調査

昭和46年における試掘調査及び昭和47年における第Ⅰ次発掘調査に於ては，一応縄文時代押型文土器の文化層の存在を確認し得たが，以下の層については未知のままで残された。それは調査期間及び規模を最少限に留め保存措置と開発行為が具体化した時期にそなえて調整資料を得ようとする町教育委員会の意図

に添ったものであった。洞内は開口部まで完没した左半分をなお無傷のまま保ち得ると考えられたが最少限の遺跡相把握の必要がなお残されており，昭和48年10月３日～７日の５日間第Ⅱ次の発掘調査を実施した。結果的に，押型文土器の文化層以下は文化層はなく基盤に到達したが，正面左半部分については完没しており，その態様は未知であるが，一応の完結を見た。このあと本洞穴は町教育委員会を中心に保護策が講ぜられることになるので，一応の結果として報告書を草するに至った。

本県の遺跡相を見ると，全体に地形峻険の故に堆土がうすい所が多い。先縄文時代～縄文早期頃の遺跡はその数少いが，第９図に見るごとく，比較的であるが，300 m前後の高燥地形に立地しているといえる。また，県北一帯の洞穴ないし，岩蔭に立地する点が目立っている。今回の前田川内洞穴の調査の目的は先述の緊急性の外に，県南においては南高来郡吾妻町の弘法原（こうぼうばる）遺跡以外，良好な押型文期の遺跡包蔵地を見ないという状態であり，県南地区における同期の包蔵地に接して，その様相を把握したいと希求していた。

前田川内洞穴の調査は前段の緊急性と後段の学術性によるものであった。

第Ⅲ次調査

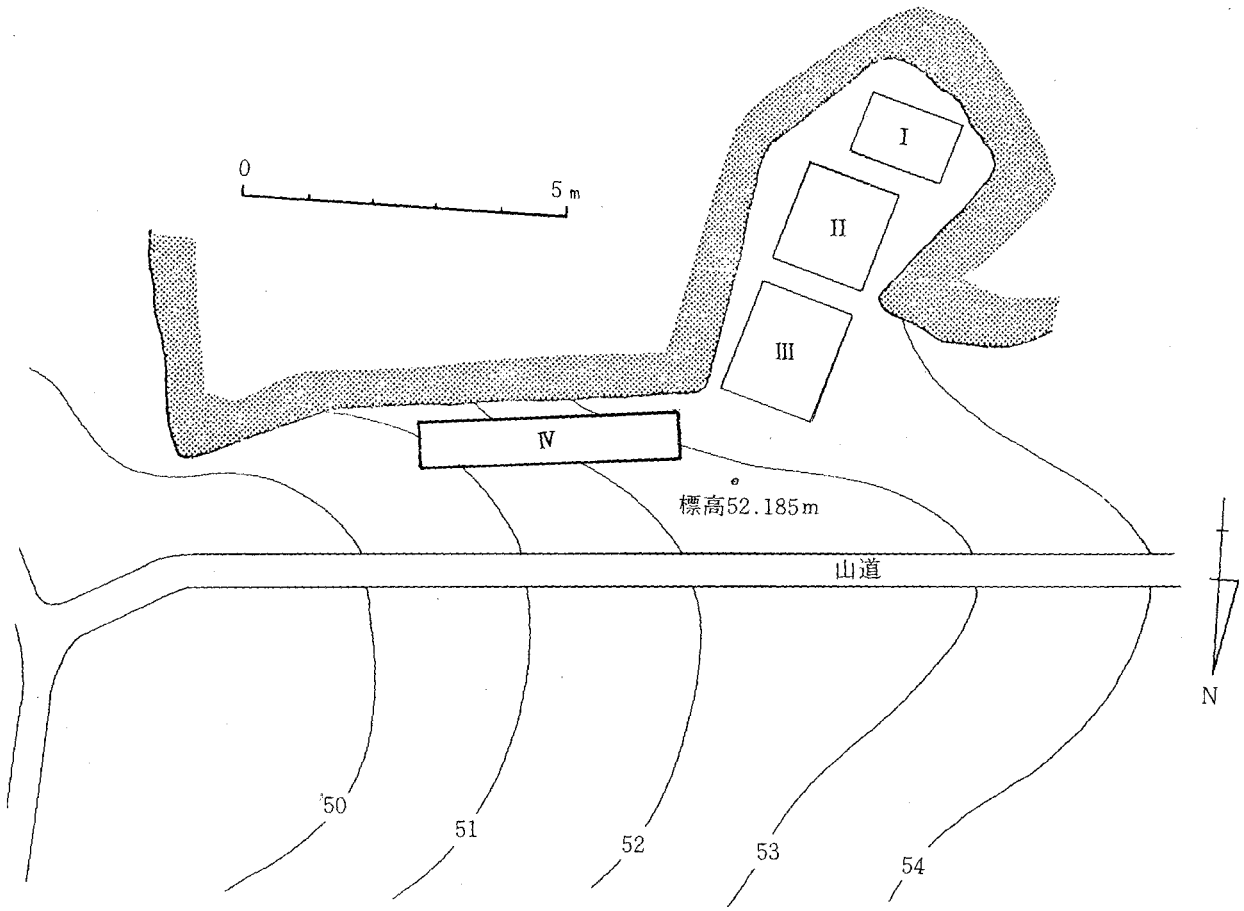
前田川内洞穴遺跡は後述するごとく集塊岩の巨岩下に立地する遺跡であるが，前２回の調査によって，その概要把握が可能となったが，土砂の流入充填著しく，向って左辺へのひろがりが注目された。現状では，開口部左辺は土砂によって完全に密封された状態であり，洞内の全規模を平面的にとりあえず把握する必要があった。

調査は以上の目的と，以後の保存対策の立案資料を得る目的をもって，昭和50年３月下旬に４日間実施された。調査は，第Ⅱ次調査の時点までは植林のため全景の撮影等も困難であったが，昭和49年末，土地所有者によって伐截が行われたため集塊岩群の全景も眺望可能な状態となり，調査も円滑に進行した。

今後，本遺跡は町教育委員会の手によって保存策が進められているが，昭和45年の発見以来，各調査回次の規模は小さくとも，地道な立案を推進された町教育委員会の松尾五郎氏をはじめとする町当局の方々の努力と企画性に，現今問題が大きくなっている文化財保護の在り方を示されたものとして深い敬意を払うものである。また，度重なる調査の趣旨をよく了解され，数々の利便をあたえられた土地所有者桜木集安氏には敬意と謝意を払うものである。

調査参加者

松尾五郎・野中健次・佐藤靖彦・左近充正明（以上長与町教育委員会），流川　厳・浜野啓史・杉本光博（以上長与町土木課），築城節子（長与町在住者）・喜々津 哲男。（千葉大学生）・正林　護（県文化課調査担当）



第3図　洞穴周辺の地形

Ⅱ．環境と地形

長与町は，長崎市の東方約10kmにあり，東隣の多良見町と琴尾岳（451 m）を境にして接する。北方は大村湾の景勝をのぞみ，湾の東方は，佐賀・長崎両県を分ける多良岳（986m）及び大村市の扇状地を望む。湾の西方は西彼杵半島を遠望する。町北岸は砂嘴とロッキーコーストが交互に続く海岸線となり，西彼杵半島東岸の同様な海岸地形に連なる。大村湾東岸，大村市及び東彼杵郡は逆に，扇状地形が緩かに海没する地形となり，対象的な形観を呈する。

町内を貫流して長与浦に注ぐ長与川を境にして地質的には相異る形相を有する。即ち，長与川流域の狭長な沖積地を境に東方の琴尾山山塊は安山岸を基盤とし，長与川西方及び南方は第３紀層を基盤とする。

前田川内洞穴の所在する，長崎県西彼杵郡長与町岡郷字丸尾周辺と琴尾岳の峻険の中腹域は，現状山林若しくは甘橘園となるが表層うすく，集塊岩巨石が吃立し風化洞を各所に見る。毘舎門岩等，かっては遺跡が立地したかもしれない好条件の風化洞は現在悉く損壊され，遺跡の存否については憶測の域を出ない。

先述のごとく，町の立地する岩層最下部は第３紀層に属しているが，遺跡の立地する町北部は矢上層に属し一部砂岩層が露出している。この砂岩層は広く伏在し，丸田等の丘陵地に露出する古第３紀層に連っている。町北部の新しい火山岩類は第３紀層を被覆する状態となり，集塊岩（火山角礫岩）が発達して先述の屹立する奇岩の様相を見せている。この岩塊は風化度早く，脆弱で，亀裂と剝落が激しい。この脆弱な岩塊下の空洞が前田川内洞穴遺跡となっているわけで，後述のごとく掌挙大の角礫を多く含む層位は，洞内天井の剝落によるものであろう。

前田川内洞穴は，調査が十分進んでいないので，正面左半分については未知であるが現状では押型文期の小時期に限って利用されたようであるが，風雨にたえ得る好条件をもちながら短期間の利用に終ったとすれば，この火山角礫岩（集塊岩）の脆弱さによる天井剝落によるものであろう。ちなみに調査時点では，角礫を含む層の上に押型文期の生活が営まれ，終結したと考えられる。

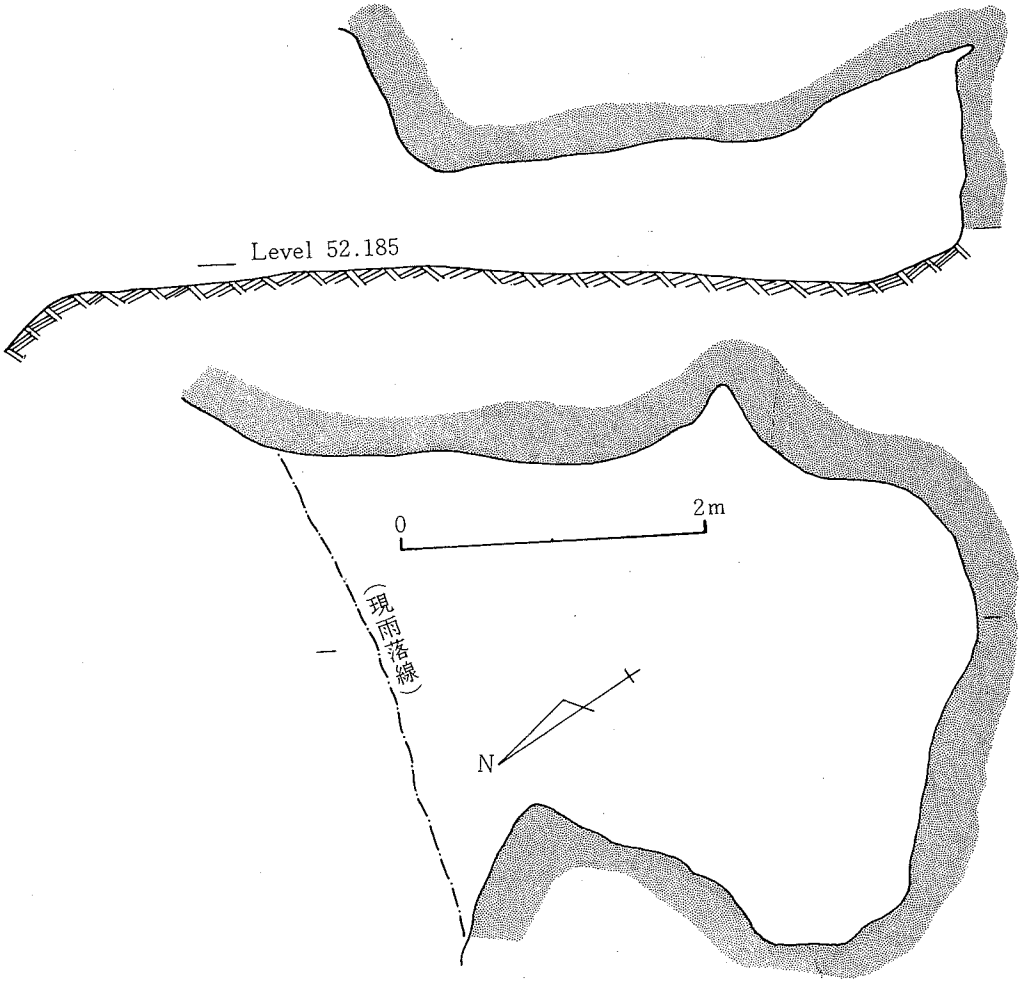
Ⅲ 調　査

前田川内洞穴はⅡでのべたごとく第3紀層の上に被覆する火山礫岩（集塊岩）の巨岩下に開口するが現地は標高約50ｍの山林中にある。一帯には三塊の巨岩が囲繞し風雨をさえぎるには好適であるが日照度は北西に開口するので必ずしも好適とはいえず，また急斜面に開口するため必ずしも好適とはいえない条件下にあるが湧水は豊かであり，開口方向等はともかくとして小時ながら遺跡が立地したものと考えられる。

調査区は，昭和46年度の試掘坑に続いて1,5ｍ×2ｍの小区を，洞内から前庭部にかけ2区設定した。（第3図）

1，洞穴（第4図・図版Ⅰ）

洞内開口部は前面西半部に限られ，60cm程

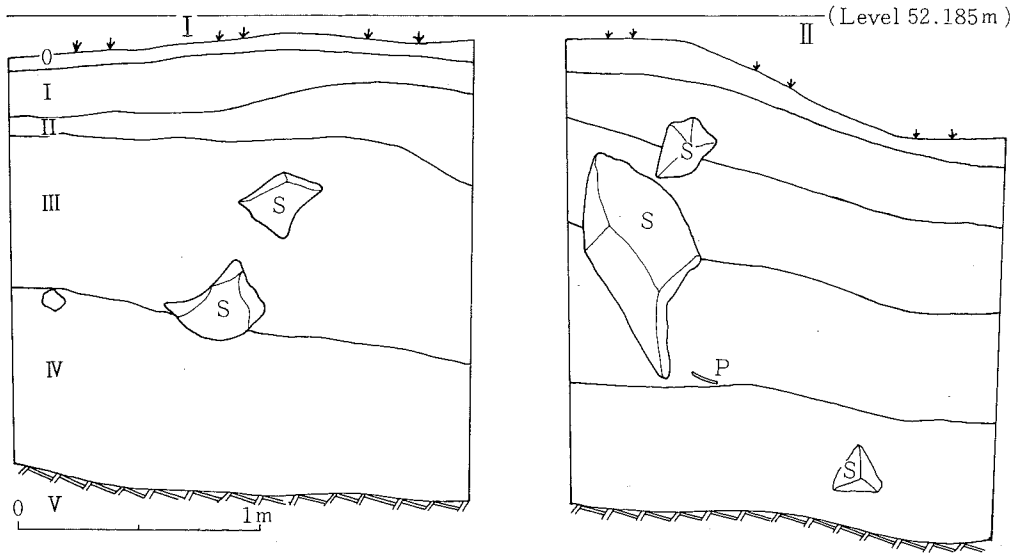


第4図　洞穴平・断面図

度の高さ開口するにとどまり，洞内はわずかに高く 1,2m程を計る。洞穴平面は現雨落線から 4 m 程度の奥行きを計り袋状の平面形となる。

2，土層（第5図・図版Ⅲ）

洞内表面は平坦で標高52m程度である。表層は5cm程度ほぼ水平に堆積し，黒灰色の微粒土となる。賭博に使用されたといわれる洞内表土は炭化物等散乱し天井にもススの付着著しい。Ⅰ層は黒褐色土層でやや粘質をおび有機物の混入著しく，近世磁器の混入を見る。第Ⅱ層は間層となり黒色土で粘質をおび腐葉土を混じえている柔かな堆積を見せるが，ある時期に土砂とともに流入堆積したと考えられる。第Ⅲ層は表面からの深度 0.5m程度から堆積し角礫微粒を混じる黄褐色粘質土で有機質の混入，炭化物を見る。洞内天井よりの高さ 170cm程度より始まり起居可能な空間を確保できたと考えられる。最下部は表土よりの深度1m以上を計り，火山礫岩の落盤が大ぶりとなり，遺物包含は，人頭大以上の角礫包含レベルの上部に限られる。この層は，現雨落線よりやや外側から緩傾斜を見せ，遺物包含の濃密な部分よりすれば，当時の雨落線は現在のそれよりも2m以上張り出していたことが考えるれる。往時の生活面はこの層の時期に成立したと考えられる。以下，表層よりの深度 1,5mにおいて，砂岩質の基盤に当る。

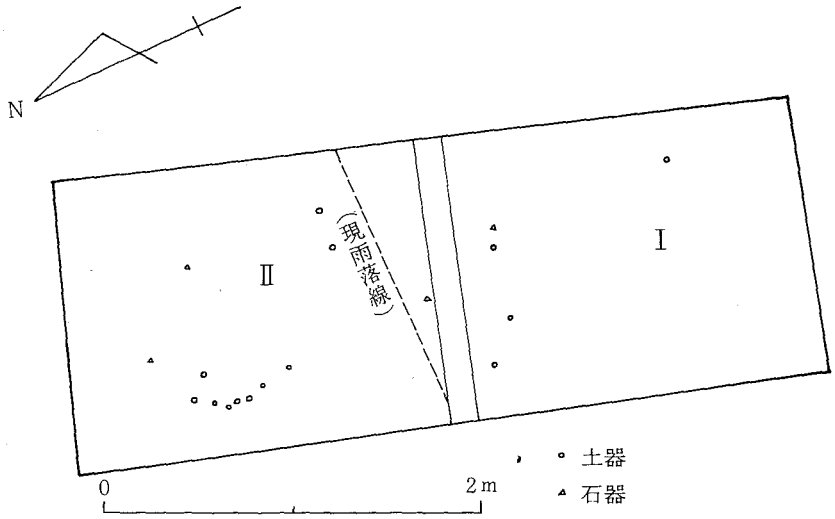


第5図　第Ⅰ・第Ⅱトレンチ西壁断面図

0 表土　　Ⅲ黄褐色混角礫土層（包含層）
Ⅰ黒褐色土層　　Ⅳ黄褐色強粘質土
Ⅱ黒色弱粘質土層　　Ⅱ地山砂岩

3，遺物の平面分布（第6図）

前田川内洞穴の遺物出土は，調査面の狭隘さもあり，その数は微量であるが，平面分布はそれなりに塊状をなして検出された。図示したごとく現雨落線より外側において集中的に検出されており，天井剝落により雨落線が後退したものと考えられる。



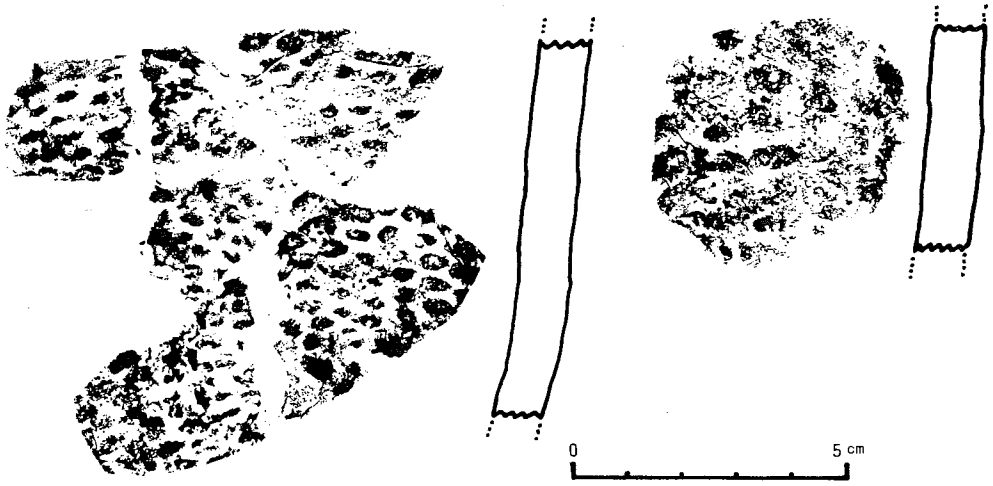
第6図　遺物出土状況図（第Ⅲ層面）

4，遺物（第7・8図，図版Ⅳ，Ⅴ）

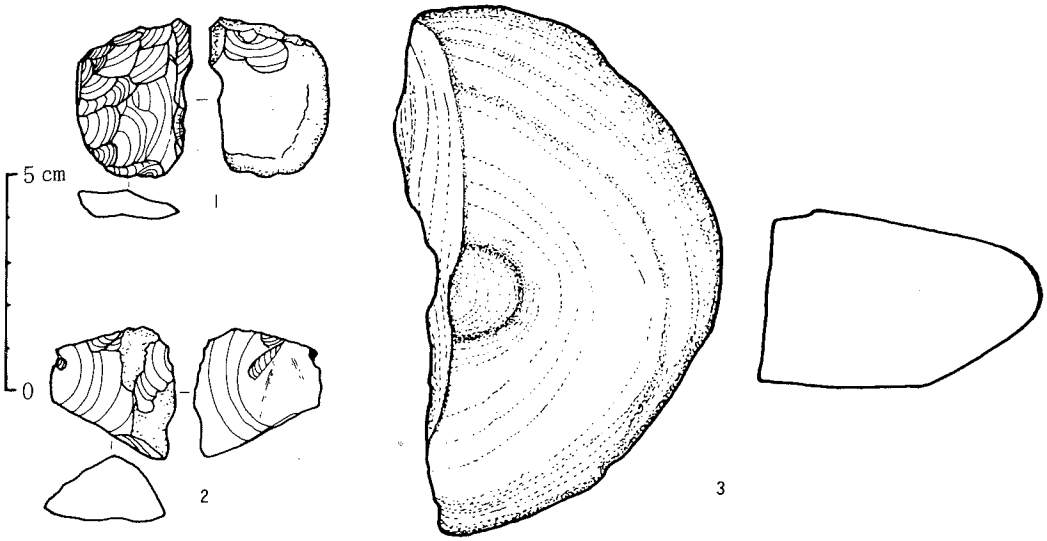
土器は文様を有するもの，無文のものを合せて14点を検出したが，明瞭に器形を復原し得るものは少い。文様を大別すれば2類に分類可能である。即ち第7図　図版Ⅳに示した中粒の楕円押型文と大粒楕押型文であり他は無文である。前者は茶褐色の胎土で焼成良好であり，厚手で施文は表面に限られる。施文原体は周囲3cm程度の棒状体に刻文したものと考えられる。後者は，より肉厚の器壁を有し6mm×5mm程度の楕円粒の刻文を見せるが原体規模は，土器片が細片であるためうかがいえない。前者同様施文は外側のみに限られる。3類は無文厚手の土器で胎土等1・2類に似るが無文であるか，施文部分以外であるか分明でない。

石器は数点に限られ，黒燿石製掻器1，肉厚，断面三角形の剝片1，うす手剝片1，安山岩製凹石1点があり，チツプ10数点を数える。第8図1は，光沢ある黒燿石剝片の片側に微細な二次加工を施した剝片石器でありb面に自然面を多く残す。2は肉厚の剝片で古色著しい。同様剝片は表採資料であるが諫早市川頭遺跡および小長井町山茶花遺跡において出土しており，打撃面は調整された石核より剝取されている。3は掌拳大の扁平な安山

岩礫を利用した凹石であり半分を欠損しているが，同種石器が押型文土器と確実に供伴した例は，県内では南高来郡吾妻町弘法原遺跡[註]の例がある。



第7図　第Ⅲ層土器実測図



第8図　第Ⅲ層石器実測図

Ⅳまとめ

前田川内洞穴遺跡は，長崎県佐世保市及び北松浦郡一帯に濃密な洞穴遺跡に比して，最も県南において分布稀薄な洞穴遺跡の一つであるといえる。第１表で示したごとく，最近諫早市在住の古賀　力氏の発見になる諫早市湯ノ尾町善納(ぜんのう)洞穴（楕円粒及び山型押型文土器が出土したという）以外に洞穴遺跡は皆無に近かったのであるが，その点，本洞穴は県南最初のものとして注目されるところである。洞穴に関心を寄せる理由は，良好な包含状態を有する平地遺跡（砂丘遺跡を除いて）としての縄文遺跡に乏しいという点に係る。因みに第１表の押型文を出した遺跡の中で洞穴遺跡を除けば，吾妻町弘法原遺跡以外に良好な包含地に接しないということであった。また，そのため，押型文の時期の遺跡について研究が十分になされ得ない憾みがあったからである。勿論，本遺跡は先述のごとく，洞穴の全容について調査が及んでおらず，該時期の西北九州における研究にとって直ちに貢献し得るという段階にはないともいえるが，今後の調査によって，その資格を有するであろうことは推測に難くない。

東九州において早水台[註5]，稲荷山遺跡[註6]等一連の押型文土器を出土する遺跡の研究が進んでいる状態と内容に近い将来近づきうることを信じるものである。

前田川内洞穴の時期は，その土器が十分な内容をもって出土していないので断片的な考察にとどまるが大分県下の前述諸遺跡で検討された縄文早期に比定可能なものであり，稲荷山遺跡において，最も量的に多く検出された例の中型土器に似る。また，早水台に類似例を求め得るとすればＢ式土器の中においてであろう。但し，僅かの例をもって全体を推測する愚は避けるにしても，吾妻町弘法原の土器組成をみれば，山型押型文がもっとも多量をしめ，楕円押型文，格子目文土器更に無文土器が共伴し，凹石が共伴うことなど東九州的様相に似て興深く，本遺跡の場合も調査の進行によって，遺物の組成が共通する可能性が強い。前述稲荷山遺跡において多量出土した土器片利用の円盤は本遺跡の例（図版Ⅳの２）に共通するものがある。その意味において本遺跡が直ちに西北九州ないし九州における縄文早期文化の研究にとって稀有の発見とは言い難いが，少くとも将来の調査において貴重な重復資料となり得るであろう。

註１，長崎県文化財調査報告第14集「堂崎遺跡調査報告」正林　清水　賀川　昭46

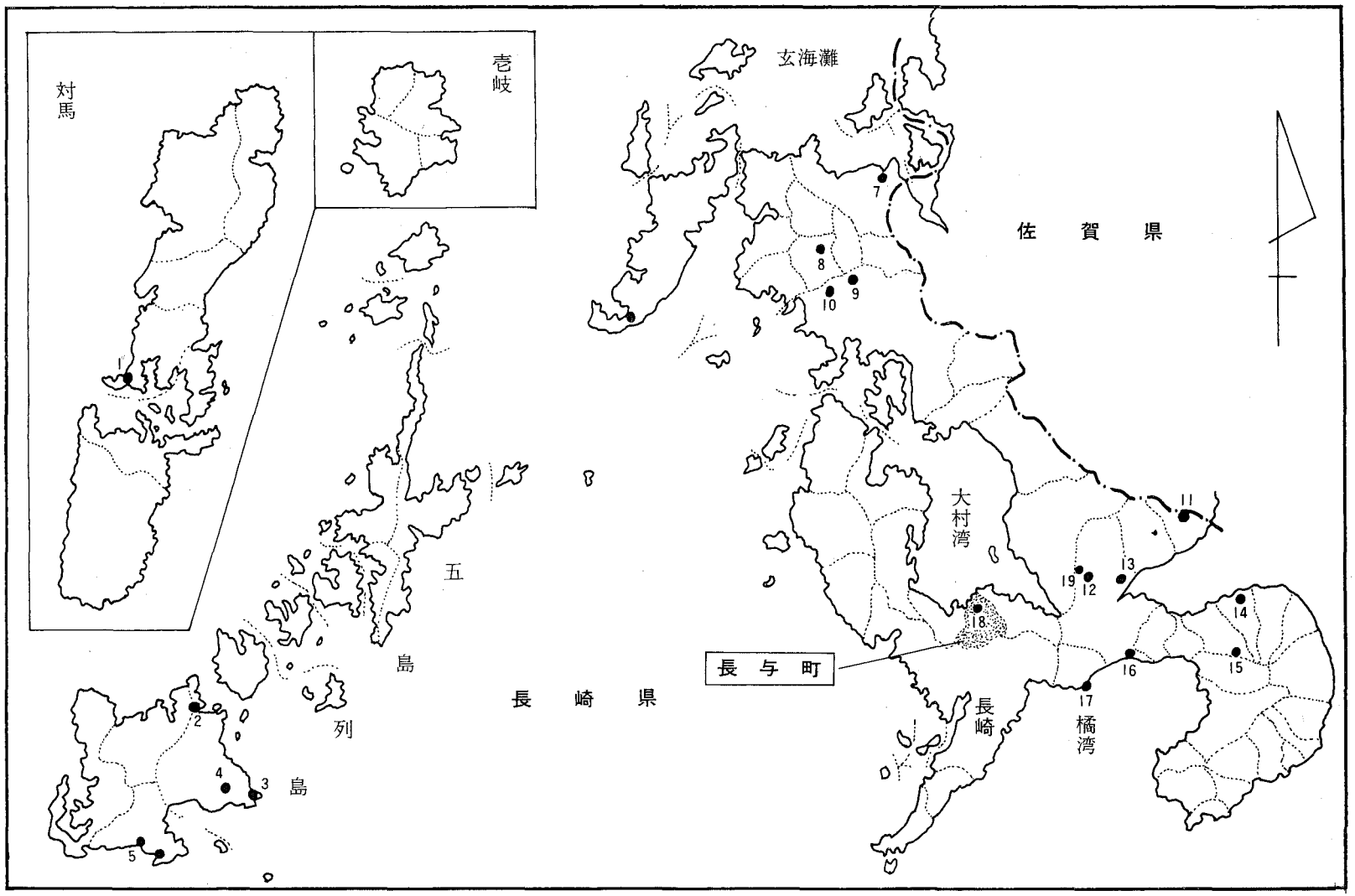
註２，昭和46　正林の現地踏査による。

註３，地元長与町内の窯跡でも長与焼の断片等が検出された。

註４，諫早市在住の研究家古賀　力氏の教示による。

註５，大分県文化財調査報告第20，21集大分県教育委員会　昭和45年

註６，早水台　大分県文化財調査報　昭42

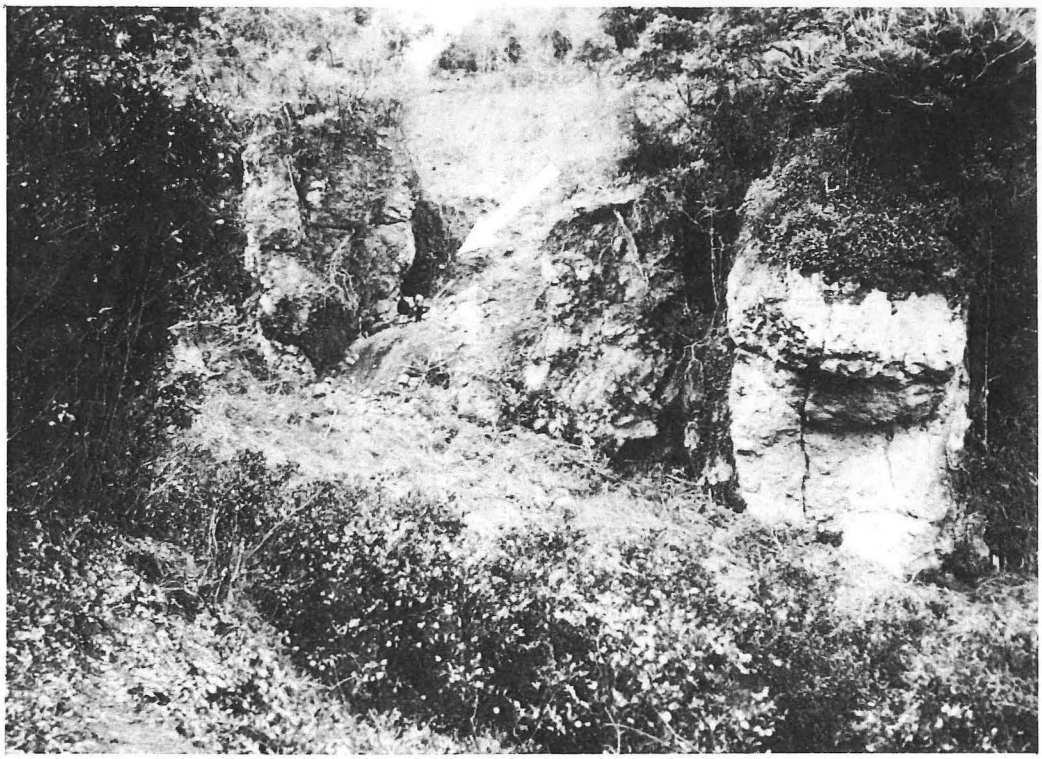


第９図　長崎県内押型文土器の出土地

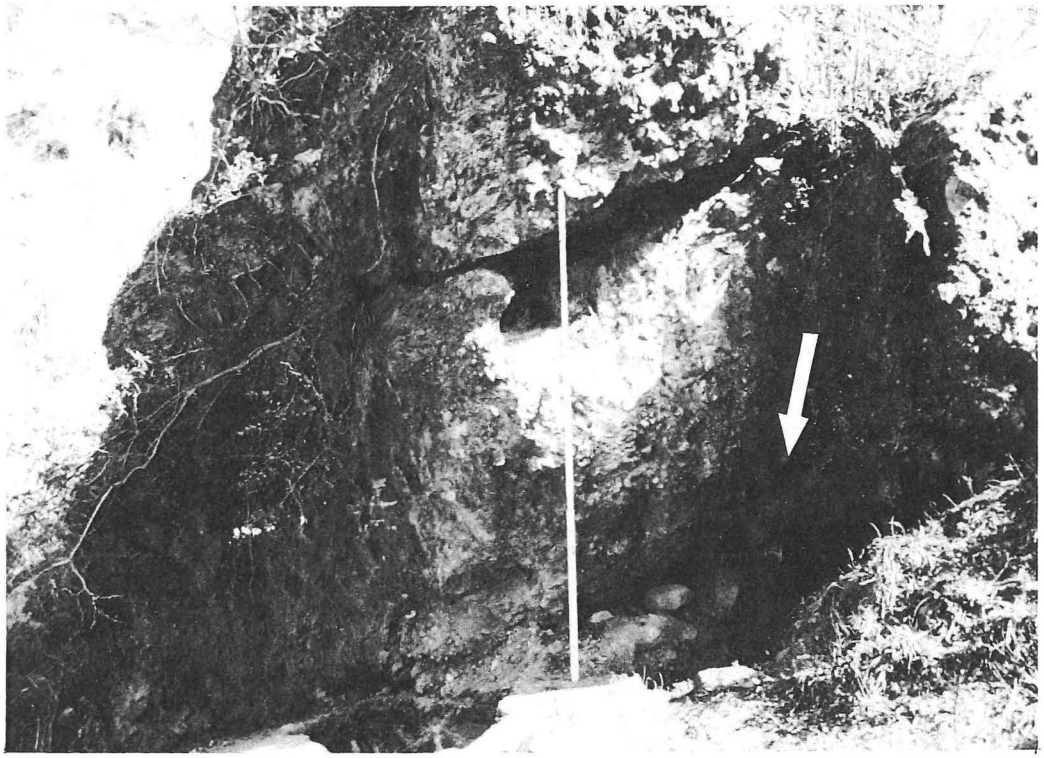
長崎県内押型文土器出土地一覧

	遺跡名	所在地	備考
1	加藤遺跡	下県郡豊玉村西加藤	坂田邦洋氏の調査による
2	茶園遺跡	南松浦郡岐宿町茶園	長崎県教委（昭47）
3	白浜遺跡	福江市崎山字白浜海岸	史前学雑誌10—1
4	皆塚B遺跡	福江市崎山町皆塚	松崎久磨治資料
5		南松浦郡富江町黒瀬黒崎	史前学雑誌6—2
6		平戸市志々伎町	平戸学術報告
7		松浦市調川町山田免湯の谷	松浦考古3
8	福井洞穴	北松浦郡吉井町福井	考古学集刊3—1
9	岩下洞穴	佐世保市松瀬町	岩下洞穴（麻生）
10	下本山洞穴	佐世保市下本山町迎野	下本山遺跡：麻生
11	山茶花洞穴	北高来郡小長井町山茶花池	長崎県教委分布調査（昭45）
12	小豆崎洞穴	諫早市長田町里名小豆崎	史前学雑誌6—2
13	川頭洞穴	諫早市湯ノ尾町川頭	長崎県教委分布調査（昭45）
14	柿ノ本洞穴	南高来郡瑞穂町柿ノ本	長崎県教委分布調査（昭45）
15	弘法原洞穴	南高来郡吾妻町弘法原	長崎県教委分布調査（昭45）
16	有喜貝塚	諫早市大里町六本松	史前学雑誌6—2
17		北高来郡飯盛町琵琶島	人類学雑誌58—10
18	前田川内洞穴	西彼杵郡長与町岡郷丸尾	前田川内洞穴調査報告：正林
19	太子堂遺跡	諫早市湯ノ尾町小字善納	古賀力氏の報告による。

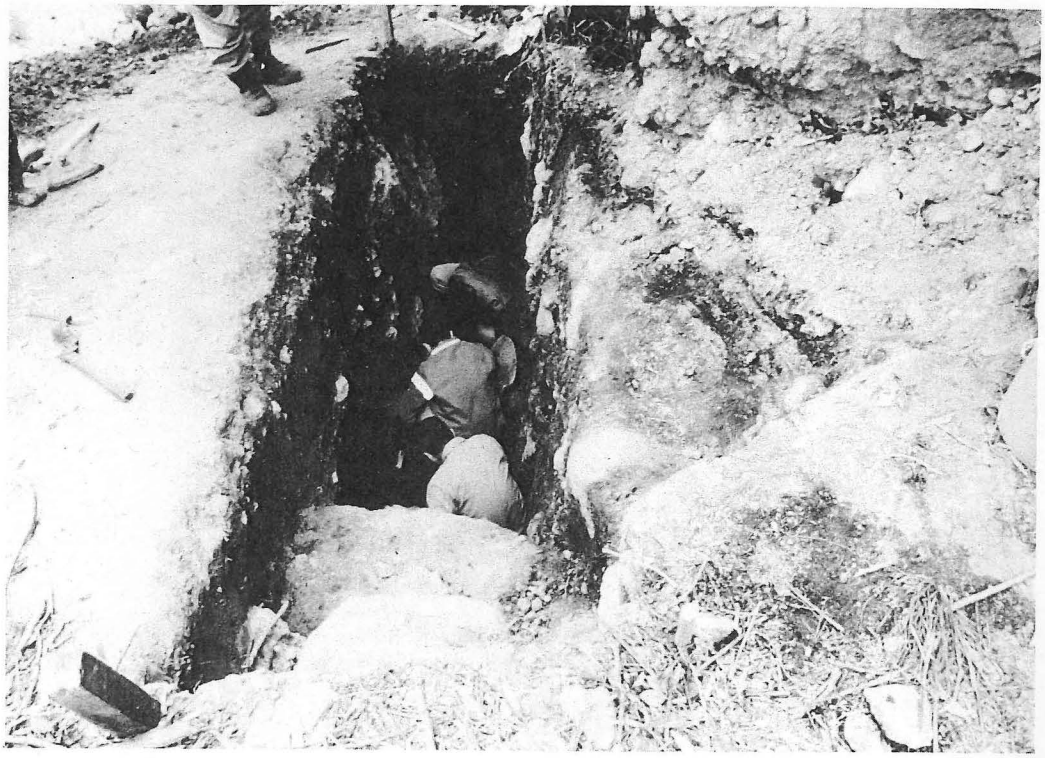
図　　版



遺跡遠景（東方向より）



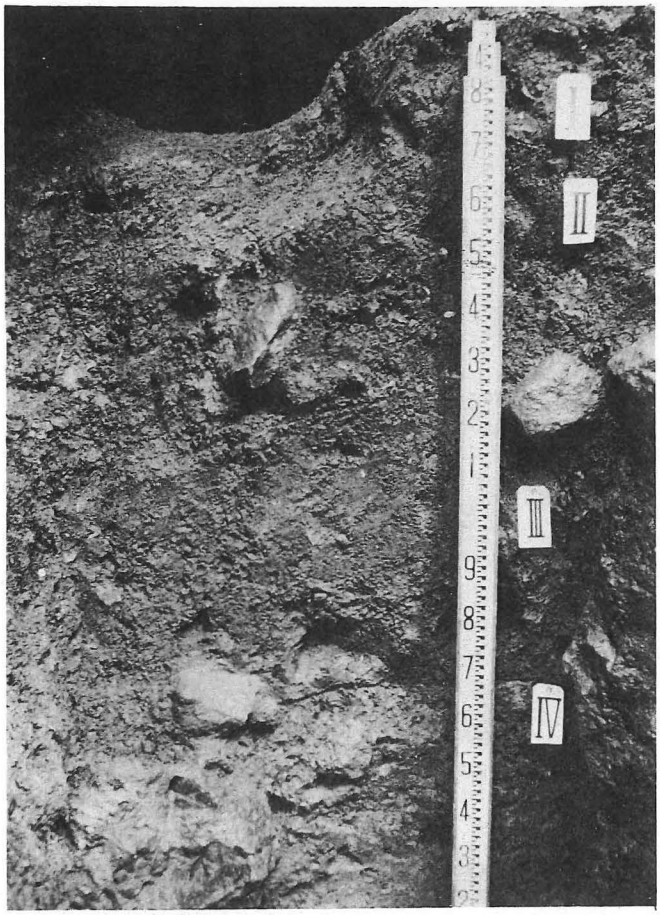
洞穴開口部（矢印）

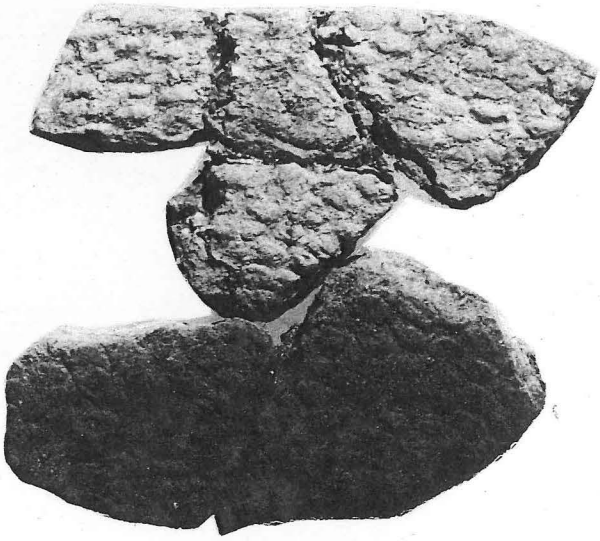


調査風景　第Ⅳトレンチ（上）開口部（下）

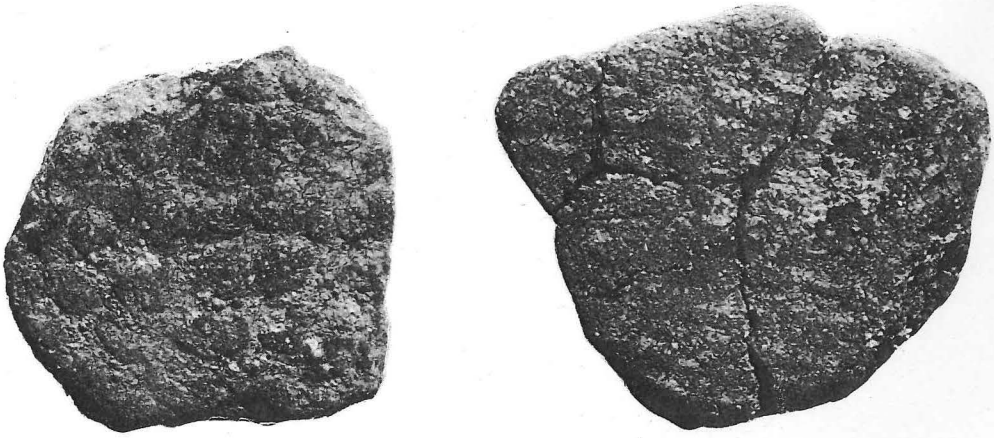
図版3

第Iトレンチ東壁断面(上)と土器出土状況(下)





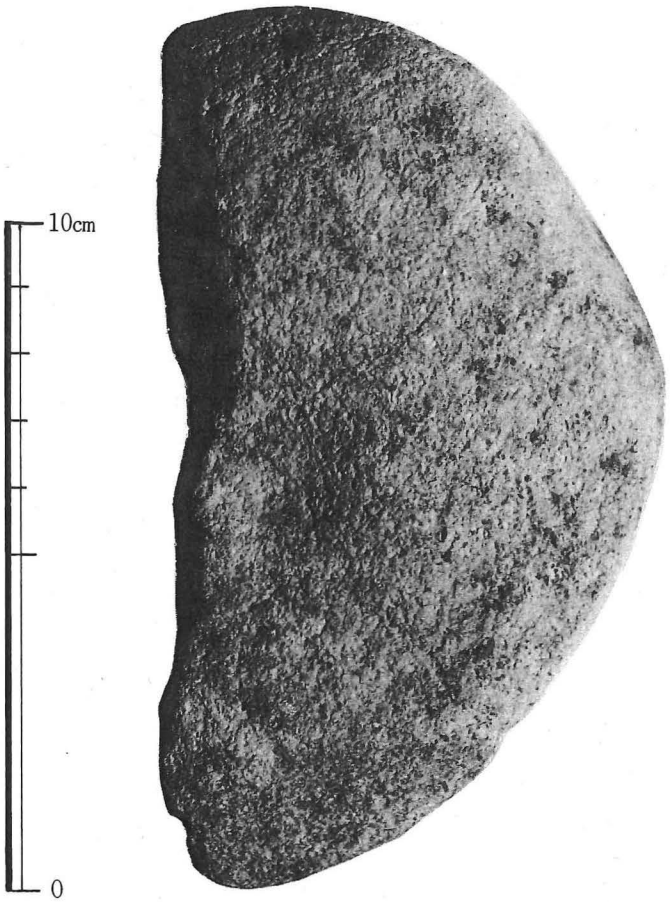
0　10cm



0　10cm

第Ⅲ曽の土器

図版5



掻器・剥片（上）・凹石（下）

あとがき

埋蔵文化財が開発事業によって損壊される例は全国的にも例数が増加し，それにつれて行われる緊急発掘調査の数と規模の増大していることは，一面において，従前知られなかった事実が明瞭になり，他面，重要遺跡の損壊は目を覆う事態を招来している。

昭和37年頃までは，研究機関等が行う学術調査と，開発に先立って行われる行政庁を中心とした緊急発掘調査が，それぞれ，全国で 200件程度であったものが，それ以後になると後者の件数と規模が飛躍的に増大し，“開発か文化財保全か”という物議をかもしている例も知見例に事欠かない。

本県にあっても高度経済成長政策のなかで他府県と軌を一にしてきつつある。かかる傾向は，地方公共団体に専門課が置かれ，文化庁の設置を見たのは周知のことであり，諸策が講じられている現状である。地下に埋もれている文化財――埋蔵文化財――が，専門的学識者によって，足で歩き，目でとらえるという方途以外，その分布状態を確認しがたい性質をもつ以上，一地方の全容把握は容易なことではない。また，埋蔵文化財の性格上，開発が行われれば必然的に文化財の損壊につながりやすいことも事実である。この相反する事態を未然に防ぐことは不可能に近いが，開発の構想時点で文化財行政サイドと十全の協議がなされることによって，不作意の損壊は少くなり得るであろう。

前田川内洞穴の発見から遺跡の存在についての確認調査，更に年を追って行われた必要最小限度の発掘調査，報告書の発刊と関係方面への周知策と保存策の立案，この間，あしかけ5年を経過したが，文化財の発見から保存策の立案まで，一貫した考えを実施に移された長与町当局及び同町教育委員会の努力に文化財保護行政の姿を見る思いがする。

この間に，当局者の努力は勿論のこと，陰に陽に御協力いただいた土地所有者桜木集安氏や町民の方々に深い敬意を払うものである。憾むらくは，調査結果の総集たる本書を見ずに鬼籍に入られた故左近充正明氏には常に地形測量等，専門的知見で指導賜わったが，直接本書を御高覧いただけなかったことである。謹んで霊前に本書を棒げるものである。

（1976年3月　正林記）

長与町文化財調査報告書一覧

第１集　堂崎遺跡調査報告　昭46

第２集　前田川内洞穴調査署報　昭49

第３集　長与焼の研究――長与皿山古窯物原発掘報告書――昭49

第４集　前田川内洞穴　昭51

長与町文化財調査報告　第４集

前田川内洞穴調査略報

昭和51年３月１日

発行　長与町教育委員会
長崎県西彼杵郡長与町嬉里

印刷　㈲昭和堂印刷
長崎県諫早市幸町 622―4
電話　代表 2―6000